へ 5
5660
1

かし寛斗しれ筆術中子登くこの
芝居志しえぬ世の人をまとしえ孫の
故くの手技は芸を集め舞ても詰
形は久しく生をとらんを擬るの
ためさまを示けるゆゑ法を来し
様手上手ゆゑ扱の功浅く
示されし術中子まで武弁の為めし
生法芸を写信し末孫海述をと

普通習字帳

門 べ8
號 5660
巻 1

竹洞翁の句集板にゑらんとて洒雄ぬし
のそれかし書を乞にしきりなり
いのちはへうんと志てあまされしなのか
いなひやらんとさすそのみて先その人
ならす洞丸に翁氏を見玉ふの布庵
ともなり武蔵の翁の郷の人也そのまゝ
り月花のなさけふかくして世の栄花
をつらやしとせす翁のいはゆる志すふ

名のあきらかに杖をひきもちゐ
かまへ人をさけるてわか捨る事
ゝまし叢句にほしく人の耳にとまれぬ
そもし俳諧の道たるやましへの美も
ひとしてたかやそのふうを世の中まで
ゝ至るとそしてやし貴賤のしる
きる程先十々美さめうに見さなし
為に社のつゝる斗　洒落をも孫として

こるやかける朽またふれしきる色よりも花
しらるゝ哥無名遊ふち於ける花の心
を於こうたしてめける前の情を見る花
なるそなれの末ゝ於ゝるくうて
日みしとをつ孫さるゝの多かる中
よ詞ひとりその桜まで乃給ひゝ葉
の林を見る花とも人のめなれし
花そたる之おもむよ新らし九とそ

孫ふその言わける色よりて後を
うたゝ詠立つしぞとをみなまて遠
まさるひふうる花さまはその詞耳よ
ちのく古なくる人まりそらひて
をもてそしる人をのゝ頃とそ於を
ミ花をゆてこゝ後さしをしわその
人をおもひやるよ歌しき友ミ花
つまかちなまはそ於いゆるゝを

はしきとらまやかる

慶應三年七月

伊能頴則

桂洲藤田垣書

逸淵發句集上

春之部

元日　元朝

元日やまゝ地をふまねるの春

元日よあふく海の古郷のなふ

元朝や月花よりもけふの宮

元朝やありくしゆる人の息

初空　初日

神代やのまゝぬ生えの日比かん
松竹たつる日より向く道をたり
神かざれよは人をも吉かなふ

門松　注連飾

門松やうまる世をまさむ人ごゝろ
門松や我は去年の深山めく
こり窓の深きかざりや松飾
山の井や花ある松にしめ飾

え方

渡しゆく松戸やされば恵方には
旅立つ先間に旅の主方と礼

万歳

万歳や顔集の中におもの人
万歳まつことしもまたたのもしさ

嫁が君

人は寝てもちの走り嫁が君

福寿草

花の名のことはなしや福寿草

雑煮　当圃
献立の通し山家の雑煮かな
当りめや先玉川の水の味
屠蘇　牧子
新よめのうとき嫁しめてり親心
数の子のやましの箸の取そしめ
若水
若水や遠山松の下しつく
元日立春

年経にも鶯しさす梅の花
二日　初暦
伊勢の海士の浜荒陸にあるこゝろかな
初暦や路まてにしそ御所山
なし暦や暦経いかの宿ありし
人日立春
まつ松の露霧ものやきまぐし
干鱈　女礼者
干鱈きるまゝにも御局やよるかる

月さすや女雅者のまし　行尉

ね子　子雜

いさ鶴のもちまねやうて月秋作

冬都しのとちのまま大うむ子雜作

若菜　七種　嵐蘿子

露のかまはるうて市の宮ふ作

七草ハたうて雪の古傷ふの野し

雪霧まぬふ宅路まね　嵐蘿子作

御子　小松宮

牧苗をあめくるゆり初子の日

見えて花ゑハ何の出るまし　小松宮

仕様る日ハ忘ゑてしさるれ豊季

小松ゆや叙くまま出まよ風の吉

正月

正月や親の日まくめり忘ゑ枝

正月もとのうくまれ　桂松ゑふ

捷月

僧ありまし餅を割む　捷月作

判猫
兎も角もなくて出しけるに
風巾
張り強き親の声つ猫や風巾の糸
評判の風巾猫しさま仕まひたり
藪入
やふ入のや雲はなれ人より子のしく
猫の恋
絹ぬくも去のうちに猫のゆく媚哉

去年の秋の猫もこもり吾妻猫
苦 雛子
苦のまつ吉一昇り狸引
苦や猫しく猫まして去年の春
こしひ去年の比到ナキヤかり憐
雛子の新春ハ多しぬ思ひかけ
餘 室 春寒
新しき月日よハ似ぬ餘寒かな
去る人にしぬ人あらましかなかな

岸のほとりの水鳥ハ春のさむさ哉
舩頭も雪山越けりの余寒かな

冴かへる

冴返る嵯峨の蝶ハまだ[illegible]
紅梅の作

みちのくの寒の名残や冴かへる

沫雪

沫雪　雪解

沫雪のきゆるや うすき雪のこゑ
雪佛猫まんもさすれば翁より

東風　春風

東風ふく日ハとまりね 楼門
春風ふきしめて舞や江戸見坂
千鳥川やむ 春の柳風のふ
春の夜や出ルふきさる花のさち

陽炎

陽炎や ふりむくも我影なし
猪身よ陽炎うつや大井川
なかなかや陽炎の様ハ名所哉

いさゝや森くみゆる萩の波より

霧

ゆあきくのすゝしや春の汐く

筑山もふもとのみつくらへまく

朱雀の窓村落くり夕かあく

月の出入りまゝせ渡る霧のうち

後月

後月　春月

此秋よまとの秋は新し後月

すゝしき晩ららしみの後月

後秋は光て残りいのちの綱

去りしは盛まさま春は月

春秋

春の秋やと似て形くさも数ほき極

春の夜や正月あるらせてより

春月　永日

春の日や花の戸に霧籬の松く

永き日やうかきしくも来るふ経

人つまとう語りもれなる日の長き

春水　ゑ涯

仮橋や野のふまさし春の水

京出て京まで帰る泪かな

不二すそきれて滝りぬる春径

春雨

春雨や風呂しきこけつゝみかへ

春雨の日数くもらしせはしきに

夜は入て遠雷や春雨の雨

梅もみて春雨ましら滝の町

鶯しく春雨の夜や枯芭蕉

春の山

従此ゆ志まし深し春の山

我もまゝ見りきたるや春の山

白雲やこふ見えの春の山

　　皇芙蓉

志人の雪まゝのまゝ生の山

海

海苔

海苔の味もしく深く身かまり

濡てこし寐ころや海苔のうしろ髪

梅

いつまても春は冬の色梅の花
うちよする梅白妙のよきはしくれ
菅原はしらぬ志し梅や泉岳寺
白妙やちらて見事入よるの梅
浦の梅よく〳〵見れは隣なり
月雪はよそにきゝたる花よこめの花
梅柔しくあらそふ針梅花

一寸もゆるへは惜し梅の花
去年の十月の花盛しらしの
めりよ[illegible]くゝ御志はなりぬ
花もゆるしてもゆるして梅の春

紅梅

紅梅やさきくらやまの麦畑

柳

柳見て[illegible]きぬ手足引
柳まくゝは清かり晴の雪

如月の梅未てあし気色ぬし
いつ人西馬の文臺披露に
梅老て柳にゆかる垣根かな

椿

こゝろ脇く旅の名にしき後をさは
花霜をのこしける社の椿かな

白子 菜の花

きへこそきや咲る五年おたふ百和
雪圍や白みのこへとも人うち

春の代のあれ須ぬ山のこゝろ

萱

木槿もはや姫さらし山のきゝれぬ
枝園望五の人に組んの遠章
山路ありて神田塚を残しも置て
神垣や葎に埋ぬ白きゝれ

彼岸 涅槃會

孫きたく親子たつる彼岸かな
涅槃会の日とて節ものさはれ

涅槃会や涅石様に石のよし

西行忌

時しあれ山は清を我し　西行忌

雲雀

子し積の流れのうけるも雲に

遊水を追しつゝける雲雀

帰雁

羽ふるゝ夫やう帰るや門の夜

明んとて又なる夏にまとる伯い杉

引雀

露引やうく岩しきを三線情くし

雲ま雀引声すうり中心く夕星

雀ま側く雲も見逃す花瑞れ

雲ちまる入

里利根

夕ま乃声　朝影に雲ま入りゝ夕星

蝶

さまかの羽ま　雲の毛　山つゝゑ夕

名うしや一ツまみもてみのこと
猫くしやてふに對して告
啼るかろ外に旅寝蝶のふ

蝗

月しろに虫鳴きけく浪の声る
海山に声も慰の寺さくうまつ詠

蜂の巣

蜂の巣やつりね尾上の猪の中
細我蜂の用保ふうき 秋子

初雷

雉の庭に神つる眺のゆのしなり

出代　寒食　雛

出代や守しらんし世の宿りまり
寒食や一日久しう子のうく
雛わらしまるゝも忙しぬ宿眺詠
かへりみ難しや雛に志しもある心

接穂　常吉

まかろしにこゆる接穂の花笑 弘

夕されの入る木の間や四ツまふし

桃

桃さくや母の住しく宿まもる

梅よりもむつましさや桃の花

桃李

李すもも花はおしも紛らかす

一はまいまきぬ花を李すもも

待花

花さかり月日も知らし月日に

花

初ざくらや人待よしもこゝに一里

まつ花の氣ゆきとゝや梅の中

行くともゆかりもあるや花の宿

花の庵の隣も何れも花もしれ

そよぎまちまちぬ中の花の風

花まちぬいのちあるや十もの

花咲き時も来し花待しく

宿は未だ雪も咲く秋の花

猿の山見えまさりや 告(?)り
なかにハちる花を惜むハ待まさり
三よせふりまさに来るを遊ふ
一本しるしありける花見に
花の戸ハ風ふせきて来る桜かな
花遠しさりとし待せぬ人のかな
人親や花ゆるされて見えけり
東秋亀嗣輝
花ゆへの子孫の数まさりけり

桜ともえさかりして花盛し
さてこそハさこ流さるこそむの花

梅

花とさきと心の行して神さえて
まふりしもちて来まつり咲されて花
見し世との人をたのまぬ梅かな
名をまして其枝多きさくら花
我来ての本に咲きまさりけり
さらぬ来も見え忘れハせぬ梅花

八重ならん一重八重よりまさりけり
楊よりも奈良の見ごとし色さかり
色みえずなる花の精や遅櫻

松の花

花さかぬ松すら一花待の空
雨降まくは雨そゝぐへつらし松の花

山葵花　茅花

香も味もぬけし花咲山葵哉
蝶は草むらさしまねく茅花哉

摘草　嫁菜

つみ草や手まゝ一度の若なり
摘草やまる嫁に思ひ立
住む人の手をまちかねの嫁菜かな

蕨

さまゝ来丈の拳まぬらしひろけれ

山吹

山川や岸をこゝろも散まぎれ
山吹や葉の色くらしも花の色

山川や拂せ袖のなかき吹とまり

索搆

索搆や園をみてつるきをし見

學百千鳥

鶯さしけれよ辛ーゝ梅の声

米壽賀

花折ときる花を千とせ百とせ

冬の菊

小春日は清しけやの露 菊の香に

梅しせぬ鹿といふ妻ぬ菊や鳴

茶館

まつ帳の茶は香るよつるき分り

我の心うしての見ぬ小帳の香

柳の落葉

山まての仕は未しく柳の落葉

霜の列

ふつりと梅と枝を霜の列に

萱春 故春

箕船帰帆

海山の人もしらめくゝ春くさぬ
ゆくまても大江あらて町の中
行春の一帆をせまるくしきに

朗詠

新都をまくまもぬるゝ唐らふ
草の芽ハ蹄をまつめハ揺をく
とく騰き梅くはなのきらんれ
夢ハ寂てし雄の月親くの家

雨ふ蝶よ空ハ雨くの世しく賤る鶯
雁近ふゆや花あききまの春の人

夏之部

四月

京都より奥ハ人なき四月かな

嵯峨ハ穀生りきる卯月かな

袷

更りの世に傲ふてる行もかな

子規

かけ付る木綿の宿に抑く雉かな

まづ近や聲きしまに来にけり

猶声にとるゝ里不如帰

子規人まてハ月待時鳥

夏の伽も我しこゝ聴ぬ声しきす

啼月疑きゝまくゝのしれ子規

又しいふ啼ハやて留守子規

卯花

露花ぬれし坊主花ぬ和歌浦

卯花や花て此人の山榾き

うく坊主の卯花のてりさを翁なく

蝸牛

まゝのせゝられハ蝸やつゝつまり

子を持る殻ハ何きて

家持る殻のあくてや蛇 生

きなき我ぬ合点気 屋のうらみ

蛍

むかふへもらうしつのしぬ蛍のふ

むかるしよくるせ数の宝をきの丸

梅の木る枝の抄そくの綴ともふ蛍

蝿

是

笠の蝿ハ戸ハ明石ハ来てりたる

借りふりるハ帝の心ハ此の竹し神撫龍

子字

虫のふりの此きくの心ハ世は遊ひけり

蚊

蚊柱

むしつ追を四ハ川てハ鳴蚊ハ家

大衣の隠みしく蚊をきせり

蚊柱を蛙ふ戸の他みつしの家

幮　蚊遣火

いとゝしく涼しく入るや入て見る

雲のうちハ蚊やりもしらぬやさしさ

船の中の涼しくはなかなか蚊やりなれ

日傘

いかなる猛風極寒は日傘の[illegible]

雪よけの笠も涼しは日傘なれ

扇子

うち扇ぐ扇あふぐや志賀の浦

夜討めくちまたハまきの生けに

籠渋ふ扇のうちや富る旅籠

新秋　附月

さしもの秋や峰の松風一重

給もいね八文新秋も待かね

新秋や二階まで出る舟の禿

小町の一声を連ねる歌人

さしの秋よ中々なるかしの月の雲

東海道一秋しみ附月し

舩まつる湊の暮を秋にしのびけり

灌仏

此花や何としたりて人借り

灌仏やおほくさまのは彼人ときき

灌仏や人は新暦に負やうき

夏籠 夏書

写経懸ん筆

夏籠やこもりて清る念の声

夏籠や銀鼓のうちに夏のゆふなれ

芭蕉翁発句

此ころは散るをしらずの花を夏の門

安居

出るしほに猿も月を安居かな

葉桜 若葉

葉桜のさしくる日やこその夕

見しりたる人は乏しく桃田のあるかぎり

夏橘

きのふまでの橘いざ花橘かな

春興未廣葉
さひしさも影八かしこ我杖葉
ほそしきよ柿と棹もまの廣もむ
芥子花
百にしま此日の東路にゆるあり
いう乳もと猪あふにしの鰹葉む
大間の喜にも侍もしるや人しれかくへ
みしるかちとなしの万や庵の鶯
鶯庵一八

明すらん村ても出より若義花
一八やこちまきゆかりも一形のめ
蕉子花
浪浪ハ出来ふ出来かり杜日和
無さまにまてく帰しぬ鴨の名のちとく
色浪もいり棹立日のいかるいの蕉子も
梅の花　山挽子花
其庵
昔牡丹も子もハ出る今もかし

山居

くちなしの花さくころや比くらし

新茶　波羅

古茶新茶滝てぬ水のまさりけり

むかしにて千歳のまさるふかり哉

幟　菖蒲湯　茱玉

雨中端午

子心にあらぬ幟はしみ枕

菖蒲湯の匂ひはいかにすゝりなし

茱玉や新めく月にまさる枝ゞ

蛙子

水鳥の雛子まもり藤なし

蛙子や漣のせかり蛙なり

五月雨

さみだれや物言ふ人は笠の下

せめ来の朝顔にさく五月雨

新ふく宵行めく五月哉

五月雨も我ものゝなり哉

夜の月
望の夜よ二夜へたてし夜の月
霧しつく翁をけやまつの月
星はまたはれつゝくもる夜の月
条
早ふる雲りの出羽ゆふ
郎
あけ方の雲ゟ晴る夜や座郎
田楼　青田

楼ふ女　雲はれかゝる山河の末
代神の森や田の出の雲
描身てもしくれ行く時雨の光
笠　家竹
竹の子の節や節よ雲は出来
竹の節のしくしく藪を出来なり
にほ竹の雉を掃き雲を掃なり
栗の花　楼
咲きいつ草木條しよりの花

栗の花咲て絶譜日和かな
靜にゝ見まうふ数の標かな

紫陽花
紫陽花に又うけ出ます雨のあふ
行違ふ柳の枝ハ白粉に虎り御堂
紫陽花に七帯留を思ひけり

夏山
夏山や蹟をきくる水の音

螢
龍

ゑくゝのかや蛙思ひはす花の宅
竟て月の柱風そらつや梅ちる

夕顔
藻の花
ゆふての水のながれしよ佛あるなら
うしやけし浮藻の花の流るゝ

清川
流せ藻の花まく続こく一つ

葵
夏葉
夏草
花うきの形の日傘にまけや花葵

夜さむや枕そへしあさま秋
まちくさや草の花さへもみぢ見え

紅花

紅花摘よの京のみやげや織ふる

蚊

うき世をは川明くる月を待つや蚊蜩

蓮　葛飾花

白蓮や見るも思ふも及なし
門人米陀ゝにも許く帰郷に

躑躅の赤さきさくし桜葛の花

喚子鳥

心得てその時さびし喚子鳥
まつかくも友呼つゝやうんとゝまる
よ待る檜も茅仕の喚子鳥
声はいつくかるとも里鳴よし狭山

禽

雉　鶉　鳧　鴫

鳴くとは千鳥のうへの浮名の雲
水鶏笛吹く人まつる扉ぬに礼

蹄の音ハ静の音ハ清く月秋かな
せゝ水の月を清う行く静のかな
掬くやのかふるハ傍年て通し野

羽抜鳥　浮巣

大風に吹れし跡や羽抜鳥
見えつけくまでつゐた相しうき巣かな
鳰の巣にまらしめ緑吹花の邪

康子

掃除してあしや康子の趣愛

鮎

雨の人に行きつ付く鮎五寸

火串

よ深明て八清よきおちる火串かな

夏馬　蛭

つるん身もち夜ハ静しれぬあわし
蛭よ蜂もしらき世ヽなる

螢　火蛾

なき夜もも飛よて蛾の宿かな

岩盤の音は弱くてせゝの声
灯ともし家内のくらく附くなる

六月

六月の百とうりなる海のかく
六月や鍛冶観音まで夕景汐
六月や衣ハ恋しき昼の夕
六月ハ野猪の床もうハりなる
六月や手足まで涼し秋の露

夏氷

神代めくさきりこその形り夏氷
恭のよ似す鍛の露似す夏氷

暑

晝よりは所てかなの行きさのふ
蔵ふま雲行く園の暑さの雑

炎天　雲の峰

木母寺

炎天のこの雲は霧かさき柳か影
小松聞きなからま影しくし雲の峰

風薫 青嵐

萩さへも残りの跡まで風薫

宮柱あれはかなり今や青嵐

夕立

ゆふくまやうし待つ野やとまりの宿

夕立の虫なくもまる草むらの

涼風

すゞしさや思ふ友人ゆくて見

翁文略

涼しさのまゝには来る末のかな

墨水舟中

袖に入しあまりも涼し尾の松

清水

草庵

結のしろに冴ゆる月あかり

夜雪

金波楼上

寝まくは雪もふりえし夜雪しき

枕屏　　神鳥

枕屏のおくまくさ紀繁りこのまゝ

旅樓晩夏

・栖くのせハ旅籠の涼しさきまれ

何ちともなくて六月晦日の夜

新詠

季なくして夜の心を

春めくの世くゝ咲やむ風のまゝかな